

国際協力事業団研修員巡回指導

水産技術班報告書

KIA
18
19
A
RARY

国際協力事業団研修事業部

はじめに

この報告書は政府ベースで実施している沿岸漁業普及コース及び水産研究コースに参加した帰国研修員のアフターケアの一環として去る2月25日より3月17日までの21日間、フィリッピン、マレーシア、シンガポール及びスリランカの4ヶ国に派遣した水産技術巡回指導班の業務報告である。本書により、帰国研修員の活動状況、今後の研修コースのあり方等について関係各位のさらに深い御理解をいただき、アフターケア業務の認識への一助となれば幸いである。

なお、本件の実施のために並々ならぬ御協力を賜った、外務省、農林省の各当局及び現地において数々の御指導、御協力を賜わった在外公館ならびに事業団海外事務所の各位に深い感謝の意を表したい。

昭和50年8月

研修事業部

JICA LIBRARY



1046098[8]

国際協力事業団	
受入 年 月 日 87. 8. 15	PL1800
登録 No. 08642	89//
	TA

目 次

	頁
I. 概 論	1
1. 指導対象研修コース	1
2. 訪 問 国	1
3. 期 間	1
4. 巡回指導班氏名	1
5. 行 動 日 程	2
6. 帰国研修員リスト	5
II. 報告1 (梅林 脩)	9
7. 現 地 事 情	9
(a) フィリッピン大学水産学部	9
(b) フィリッピン水産局	9
(c) ナボタス魚市場	9
(d) パナイ島イロイロ市場	10
(e) マレーシア水産局	10
(f) スリランカ水産省	10
(g) スリランカ水産高等専門学校	10
(h) ネゴンボ水産訓練センター	11
(i) タンゴール水産訓練センター	11
(j) コロンボ魚市場	11
(k) ゴール冷凍施設	12
(l) SEAFDEC 養殖部局	12

8. 今後の受入事業・アフターケア等についての助言・勧告に関連して…	12
(a) 相手国政府機関の意見	12
(b) 帰国研修員の意見	12
(c) 助言、勧告、感想(1~6)	13
II. 報告2 (五十嵐住夫)	17
9. Questionnaire の分析	17
(a) 質問事項	17
(b) 回答状況	17
(c) 回答内容の概要	18
10. 組織図	19
11. 水産班巡回指導レポート	21
(a) 受入れに関する要望	21
(b) 主要訪問機関の事情と日本における研修	22
(c) その他	25
IV. 報告3 (飯淵貞利、石渡健次)	26
12. 巡回指導旅行雑感	26
(a) 各国の水産行政機関の attitudes	26
(b) 水産教育について	27
(c) 結び	28

1. 概 論

1. 指導対象研修コース

沿岸漁業普及コース（JICA 神奈川国際水産研修センター）

水産研究コース（東海区水産研究所）

2. 訪 問 国

フィリッピン、マレーシア、シンガポールおよびスリランカ

3. 期 間

昭和50年2月25日より3月17日まで（21日間）

4. 巡回指導班メンバー

○沿岸漁業普及コース

飯淵貞利（国際協力事業団神奈川国際水産研修センター館長）

石渡健次（副参事）

○水産研究コース

梅林 脩（農林省東海区水産研究所・増殖部藻類研究室室長）

○受入担当機関

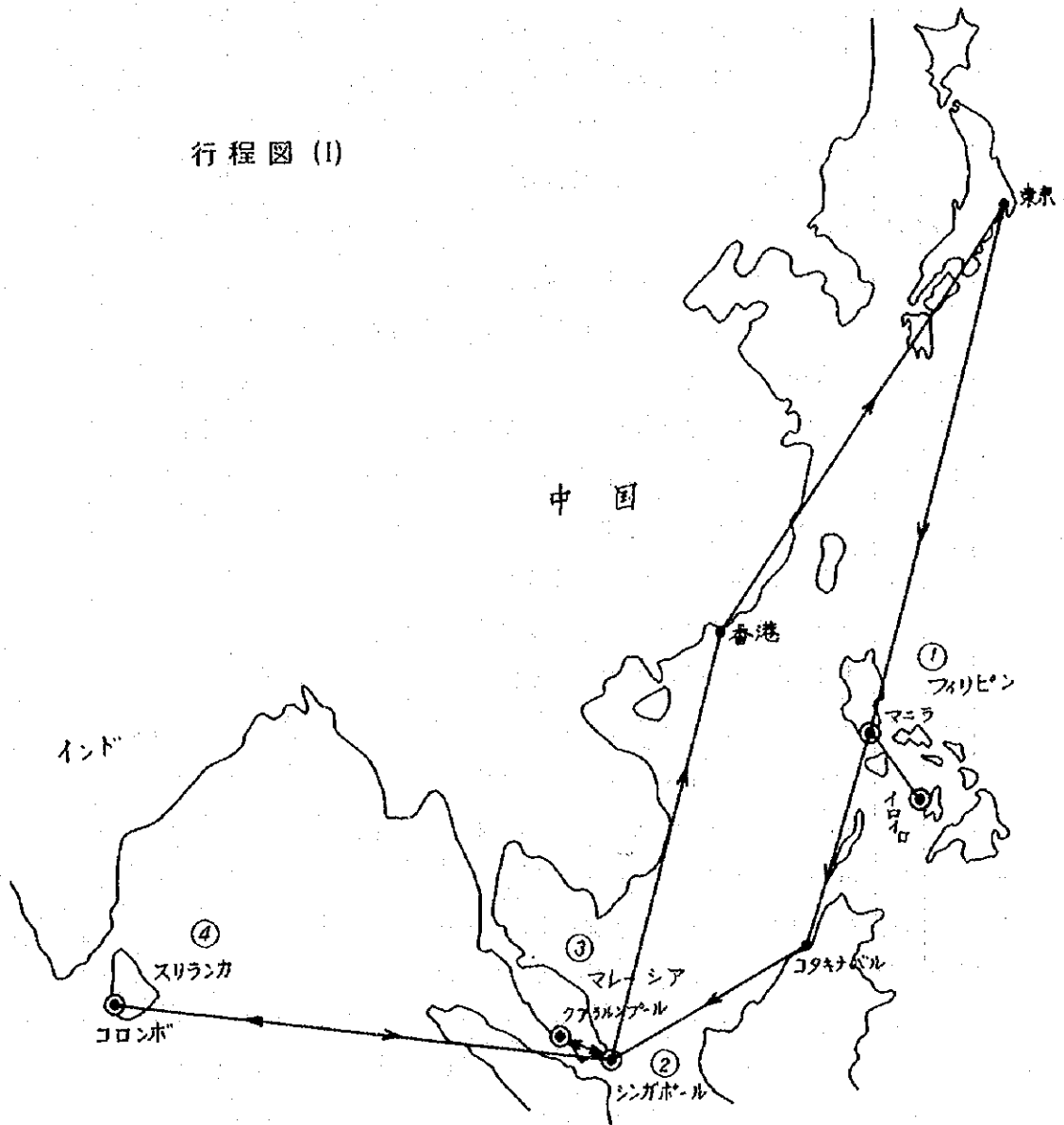
五十嵐住夫（農林省国際部国際協力課農林事務官）

5. 行 動 日 程

月	日	曜	行 動 日 程	泊
2	25	火	12:45 羽田発 16:10 マニラ着	マニラ
2	26	水	JICA マニラ 事務所訪問 (打合せ) 日比研 修員同窓会幹事会月例会参加 SEAFDEC 養殖部局事務局 (総務部長他)	"
2	27	木	日本大使館表敬 (沢木大使他) 12:30 マニラ発 13:30 バナイ島イロイロ着 SEAFDEC Tigbauan 事務所視察 (討議)	イロイロ
2	28	金	イロイロ中央市場視察 SEAFDEC Tigbauan にて日本人スタッフと討議 (梅林) " Loganes 事業所視察 (飯淵他) Quimbal 漁村視察	"
3	1	土	14:00 イロイロ発 15:00 マニラ着	マニラ
3	2	日	U.P. - Los Banos 構内視察 国際稲作研究所 (IRRI) 視察 (外部のみ)	"
3	3	月	U.P. 水産学部及び同研究所訪問 U.P. Diliman 構内視察	"
3	4	火	フィリッピン水産局訪問 ナボタス漁港施設及び水揚げ状況視察 SEAFDEC 養殖部局事務局 (部局長他)	"
3	5	水	15:30 マニラ発 20:00 シンガポール着	シンガポール
3	6	木	SEAFDEC 調査部局訪問 (部局長、次長、研修員) 14:15 シンガポール発 16:00 クアラルンプール着	クアラルンプール

月	日	曜	行 動 日 程	泊
3	7	金	日本大使館表敬（伊藤公使他） 中央市場視察 マレーシア人事院訪問（派遣担当課長） マレーシア水産局訪問（局長、補佐、研修員）	クアラルンプール
3	8	土	ケラン（kelang）港視察 ケタム（ketam）島漁協訪問	"
3	9	日	13:50クアラルンプール発 21:30コロンボ着	コロンボ
3	10	月	日本大使館表敬（和田一等書記館） スリランカ水産局訪問（局長、次長、研修員）	"
3	11	火	Kandy 訪問（休養）	"
3	12	水	スリランカ大学 Peradeniya 構内視察	"
3	13	木	スリランカ統計部訪問（担当官） スリランカ水産省訪問（次官） スリランカ水産専門学校（建設中視察） ネゴンボ漁業訓練センター視察（飯淵他） 水産局調査官に対する講義（梅林）	"
3	14	金	Galle 漁港、冷凍製氷施設視察 タンゴール漁業訓練センター視察	タンゴール
3	15	土	8:00タンゴール発 13:00コロンボ帰着	コロンボ
3	16	日	9:35コロンボ発 15:20シンガポール着	シンガポール
3	17	月	10:45シンガポール発 20:35羽田着	"

行程図 (I)



6. 帰国研修員名簿

Malaysia

Fisheries Division (Office), Min. Agri. & Lands.

Choo Joon Hee (Misaki 1965-66)

Balachandran Bala (Misaki 1966-67)

Rahmat Bin Haji Mohd. Shahid (Misaki 1968-69)

Mustafa Bin Yusoff (Misaki 1973-74)

Nawai Bin K. Osman (Misaki 1973-74)

Name of ex-participants of the Fisheries Division working in local offices.

David Chin Chee Vui (Misaki 1963-64) Sabah State, East Malaysia

Yong Foong Chuan (1965-66) Sabah State, East Malaysia

Abdul Manan Bin B. Aji Mohd. Taha (Misaki 1966-67) Kedah, West Malaysia

Ahdad Bin Mohd. Yasan (Misaki 1967-68) Penang,

Frederic Thomas (Misaki 1967-68) Johru Bahru,

Michael Chua (1967-68) Kuching, Sarawak, East Malaysia

Ahi Bin Daud Bachek (Misaki 1968-69) Simanggang, Sarawak, East Malaysia

Abdulla Bin Omar (Misaki 1969-70) Penang,

Awang Bohari Bin Hj. Awang Wal (Misaki 1969-70) Kuching, Sarawak.

Whye Seng Chan (Misaki 1970-71) Teluk Anson, Perak

Kushairi Bin Rashid (Misaki 1970-71) Sarawak,

Mohd Sain Bin Haji Basrie (Misaki 1971-72) Kuantan Pahang.

Sri Lanka

Department of Fisheries

P. V. Ramanayake (Misaki 1971-72)

Charles Mannadi (Misaki 1972-73)

W. K. T. Pereray (Misaki 1962-63)
M. Rasiyah (Misaki 1962-63)
N. L. Ranjib Munasinghe (Misaki 1963-64)
Elvin Amarasinghe (Misaki 1965-66)
S. J. Fernando (Misaki 1974-75)
M. I. Khaleel (misaki 1974-75)
C. E. Gunasekara (Tokai Regional F. R. I. 1960)
K. Sachithanathan (Tokai Regional F. R. I. 1969)
Telge S. S. Peiris (Tokai Regional F. R. I. 1971)
K. J. M. S. Grero (Tokai Regional F. R. I. 1972)
S. J. Fernando

Fisheries Training Center (Negombo)

Nuegegodege Rex. Clinton Silva (Misaki 1963-64)
P. Vivekanandarajah (Misaki 1963-64)
T. H. Gajanayake (Misaki 1964-65)
L. P. Jayasuriya (Misaki 1965-66)

Name of ex-participants of the Fisheries Department working in local offices.

R. Kananathan (Misaki 1968-69) Kandavi
E. A. R. Rasanayagam (Misaki 1969-70) Dehiwala
T. Sachithanantham (Misaki 1970-71) Jaffna
Merinnage Wimalajeewa de Costa (Misaki 1973-74) Tangalle

Singapore

SEADEC

Lim Pang Yong (Tokai Regional F. R. I. 1973)

Others

Tan Woon Kiat (Misaki 1965-66)

Goh Hai Sun (Misaki 1966-67)

Tfong Boon (Misaki 1969-70)

Chia Thay San (Misaki 1970-71)

Chua Lai Hee (Misaki 1971-72)

The Philippines

Bureau of Fisheries;

Artemis R. Tolentino (Misaki 1964-65)

F. Padua (Misaki 1965-66)

Westremund M. Rosario (Misaki 1966-67)

Amutan Mauro Muring (Misaki 1968-69)

Felimon Nagpala (Misaki 1969-70)

Abdulgafor N. Abdua (Misaki 1973-74)

Antonio P. Hugo (Misaki 1966-67)

Aurora B. Reyes (Tokai Regional F. R. I. 1963)

University of the Philippines, College of Fisheries;

Efren Ed. Flores (Misaki 1967-68)

University of the Philippines, Inst. of Fish. Dev. & Research.

Romulo C. Aure (Misaki 1971-72)

Gloria S (Factor) Labao (female) (Tokai Regional F. R. I. 1965)

Erlinda T. Bansihan (female) (Tokai Regional F. R. I. 1974)

Dagat Dagatan Fisheries Station, Malabon, Rizal.

N. Macalineag (female) (Tokai Regional F. R. I. 1961)

R. Napugan (female) (Tokai Regional F. R. I. 1961)

G. Guevara (Tokai Regional F. R. I. 1961)

Antelo L. Belnas (male) (Tokai Regional F. R. I. 1963)

Rosita R. Calvelo (female) (Tokai Regional F. R. I. 1968)

Philippine Fisheries Commission

Vitaliano B. Encina (Tokai Regional F. R. I. 1963) (male)

Rosalina Legasto (female) (Tokai Regional F. R. I. 1965)

M. J. Chavez (male) (Tokai Regional F. R. I. 1966)

R. Banania (male) (Tokai Regional F. R. I. 1966)

Sonia Pante (female) (Tokai Regional F. R. I. 1968)

Teresita S. Erive (female) (Tokai Regional F. R. I. 1971)

Remark: Misaki= Misaki International Fisheries Training Centre, Overseas
Technical Cooperation Agency (OTCA) (Now Renamed as
Kanagawa International Fisheries Training Centre, Japan
International Cooperation Agency JICA)

Tokai Regional F. R. I.= Tokai Regional Fisheries Training
Institute

II. 報 告 1.

東海区水産研究所 梅林 脩

7. 現 地 事 情

(a) フィリッピン大学水産学部

大学構内はきわめて壮大で手入れもよく行届いており、立派な建物が点在している。水産学部ビルは他のビルにくらべていささか見劣りがするが、更にその内部はきわめて貧弱であった。たとえば学生用化学実験室は日本ならば中学校程度の設備であり、場合によっては都会地の小学校程度とも思える。付設水産研究所の研究設備も同様で、他に格納されているものもあるかも知れないが、2～3台の顕微鏡と秤、いずれも旧式のものがあるだけで、全く設備とは言えない程度であった。

従来 of 視察報告時点からほとんど改良されていないようである。淡水魚飼育実験設備にしても数面のコンクリート水槽とガラス水槽若干、コンプレッサー1台、空調室(数台)がすべてという状況であった。

(b) フィリッピン水産局

局長は1961年度水産研究コース研修員である。マニラに隣合わせたリサル市に水産研究所があったが、海水汚染のため閉鎖され現在研究員もすべて同一庁舎内に引揚げており、現地調査と指導を行っている程度のものである。

(c) ナボタス魚市場

マニラへの水産物供給市場である。水の使用量はきわめて僅かで、且高価格魚に限られている。取引きの済んだ魚は屋外の炎天下に並べられており、表面が乾燥硬化しても意に介していない感じで、衛生観念など感じられない雰囲気であった。なお現在漁船が接岸出来るよう工事中であるが、現状では水陸両用車により沖繋り漁船から一旦積かえて市場に運搬しているため魚体の痛みも多いものと思われる。

(d) パナイ島イロイロ市場

ここはむしろ小売市場の方が主のようであるが、衛生状態等への配慮がないことは前者同様である。なお水産物の小売店（魚屋風のもの）は市内にないとのことである。市場内外の汚水でしめった泥の上に魚その他並べられているが意に介していないようである。水の使用はほとんど見られない。

(e) マレーシア水産局

水産局長、次長、帰国研修員と会談を行った。その席上マレーシア当局は、技術的人員の不足を嘆いていた。これに対し、我々としては帰国研修員の活用と、その活動の波及効果に留意することを申しのべた。

帰国研修員を中心とする訓練センターを地区ごとに設置し、漁村、青少年の訓練を行い、その波及効果を作り出す必要がある。又、いかなる漁港設備、漁船の建造よりも漁村青年の教育に力をいれ、教育が教育を生むべき環境作りが最も大切であると思われるので、当局としても日本の技術援助をその面において要請される必要があると申しのべた。

(f) スリランカ水産省

研究部門：数研究室に分れているが、研究員は各々各室1名とのことである。2～3の研究室を廻ったが設備と言えるようなものは全く見られなかった。旧式の、また最近使われたような形跡のないものが隅の方に散見されたのみであった。図書館はあまり広くはないが専任の司書がおり、また近著の書棚には英国政府寄贈の判を押した図書が並んでいた。東海区水産研究所で送付している研究報告は保管されていた。

(g) スリランカ水産高等専門学校

4月開校をひかえて工事中であったが完成にはまだ大分日時を要しそうで、日本から送られた機械類は梱包のまま保管されており、それぞれの棟の基礎乃至は外壁を見るのみであった。

(h) ネゴンボ水産訓練センター

水産訓練センター所長、現地職員と会談を行った。総体的な印象としてはコロンボに水産専門学校が新設されたため、物的、人的に多くのものを水産専門学校にゆずらざるえなかった。その為職員も沈滞している様に思えた。校舎施設、キャンパスにも荒廃の非を認めざるえなかった。

エンジン実習所を見ても実習用エンジンは乱雑にそのタイプが並べられており、学生は熱心に実習に従事してはいたが、なにがなしか影うすきかんを感じざるえなかった。その他の設備にも見るべきものはなにもなく、所長との会談においても人的、物的の不足を嘆き、いたずらに背を懐しむ話が多かった。より高等な水産教育を援助する事は良いとしても、それとは別に10数年間の技術協力の賜物である本センターをこのままの状態にすることはたえがたいものがあった。

素直に我々の技術協力のありかたを再検討すべきであると思った。

(i) タンゴール水産訓練センター

水産訓練センター所長、現地職員と会談を行った。総体的な印象としてはネゴンボセンターと同一であるが、開設されて日も浅く、諸設備などは皆無に等しく職員との会談の中にも訓練したくとも設備がなく十分な訓練が出来ないと嘆いていた。その為職員も沈滞している様で、ネゴンボセンターと同様であった。

日本から機械寄与することが決っておるので至急送ることが望ましい。

(j) コロンボ魚市場

設備状況、水産物取扱い状況は訪問国中最低であった。氷の使用はなく、取引きのすんだ魚は屋外炎天下にさらして小売(?)しているが、周辺の異臭からも想像出来るように魚介の鮮度は問題外である。この国の他の生活物資状態からも推測出来るように関連一般産業のレベルがきわめて低いことにも原因しているであろう。

(k) ゴール冷凍施設

外国の援助により建設された近代的な(?)冷凍設備があり、又製氷設備もある。しかしながら漁獲物がここに至るまでの諸設備が整備されていないから、庫内の貯蔵は少く、且鮮度はここに到着する以前に低下しているようである。

(l) SBAPDRC 養殖部局

日本から送られた研究機材は現在荷解きをされた状態でまだ充分稼働していないが、日本側スタッフにより事業は開始されている。実験池、その他は日本における種苗生産施設をしのぐ程度である。

しかし、首脳部の算術的施設拡大による生産の拡大は、日本人スタッフによれば、成熟親魚の確保の困難さ等から相当の困難が予測される。

8. 今後の受入事業・アフタケア等についての助言・勧告に関連して

(a) 相手国政府機関の意見

- (1) OI の早期送付
- (2) 受入れ決定の早期通報
- (3) 再研修要請
- (4) 水産加工コースの設定

また(1)、(2)に関連して、受入側としても特に水産研究コースは専門別に分化されているので、1部1名の枠の中でもその年度において果して担当することになるか否かが1ヶ月程度前にしか判明しない。これは水産研究所は研修受入専門機関でなく、多くの研究課題を独自に持っていることと研究員定数の少いことから、研究計画を樹てる上に非常に困難であるので、出来得る限り早期に行うことが必要であろうと思われる。

(b) 帰国研修員の意見

水産研究コースについては、質問書を配布し、帰国後研究上の問題点と、アフタケアについての要望点、コース改善について回答を求め、また出来

るだけ意見交換を行ったが、各研修員との対談はスケジュールがつまっていたことと相俟って充分ではなかった。

現在の困難点および要望は、すべて研究機材の不足、文献の不足で占められていたことは、今回見聞した実情から首肯出来ることである。研究テーマに応じてのスペシャリストの派遣希望の意見もあった。

水産研究コースの改善については基本的なものについての意見はなく、英文の資料を十分に考えて欲しい、日本語の講義を毎日欲しい、期間が短い、見学をもっと多く、実験をもっと多く、南方種についてのもっとつっこんだ指導が欲しい、等であった。

(c) 助言、勧告、感想

(1) O I、受入れ決定通知等の早期処理

これについては相手国側からも、数少ない大切なスタッフを半年以上送り出すことであるから(マレーシア)、これらを早期に処理されたい旨の要望があった。これは JICA としても改善しつつあるところであり、おくれる理由は種々あるので一概には言えないが、当方にとっても必要なことである。特に水産研究コースは、先にも述べたように受入専門機関でなく独自研究テーマを持った研究機関なので、1部1名受入れるにしても、それぞれ研究分野が専門化されているため、誰の担当になる分野の者が応募して来るかが、寸前まで分らないことは、研究計画上も大変やりにくいことである。可能な限り早期に諸手続きが行われるよう受入側としても希望する。

(2) 水産研究コースへの適合性

国により教育、研究レベルが相違するので一概には言えないが、従来受入れた者の多数、および少くとも今回訪問国においては、水産研究所での研修が適当と思われぬ者が多い。これは教育設備、研究設備の現状から見て無理からぬことであるが、技術指導(実技)がより有益であるうと思われる。

水産研究所はこれらの国に比して、より専門化、基礎化した課題を取扱っており、且近年課せられる研究項目は多く、人員が少い。このような所に基礎訓練的研修員を受入れることは、勢い片手間的、または極端には邪魔者扱いになりかねず、折角の受入れ研修員に不満を抱かせ反目感情を持たせることにもなりかねない。従って水産研究コースとしては（応募規程に一応の基準は決めているものの日本で教えられるレベルと実情は大分かけはなれている）もっとしぼった課題を持っている研究者で、受入側研究者と協同研究の出来る程度、もしくは助手となり得る程度の者にしぼる必要がある。

また今回訪問国の現状からみて、基礎コース、または技術指導コース（沿岸漁業コースに近いが、更に実技的なコース）として、水産加工、増養殖コースをおき、増養殖コースを例とすれば、栽培漁業センターでの研修等が、現状で最も有益なコースではないかと考えられる。

あるいは、短期に、生物については適期にむしろ現状視察見学コース的に日本におけるレベル認識のためのコースを作ることも有益であろう。これは、ひとり水産業だけが存在するのでなく、あらゆる関連産業の発展レベルの上に日本の水産業が成立していることを認識する意味で、相手国に研修センターを援助設立するのと異った意味で有益であろうと思われる。

(3) 機材供与

各国における水産業の発達程度は、単に水産業だけでなく、あらゆる他の関連産業の発達程度と関連していることを考え、大型・高額機材などだけでなく、各国の実情に応じて日常的機材をも、きめ細かく配慮する必要がある。例えばスリランカ水産訓練センターの供与希望機材リストに、ディーゼルエンジンや漁網と共に、スパーセットなどが挙げられている。これらは我国において一般家庭にさえ見られる程度のもので、このようなものがリストに挙げられているという事実は、研究用機

材で言えば、光電比色計、蛍光光度計などの要望があっても、それらに用いるビーカー、ジャーレ、試験管等の日常的資材も不足していることであり、これら大型機械が供与されても有効に使用されることがないことを意味している。

(4) 欧文資料

これについては常に研修員から要望されているところであるが、我国においては有益な図書文献が多く発行されているにも拘らず、殆ど日本語であるため直接利用しにくく、研修にあたって欧米の資料を用いることも多く、欧文による資料が望まれる。

水産研究コースにおいては現在研修用英文テキストの発行を進めているが十分とは言えない。

今後、文献資料の欧文化の方法を積極的に考慮すると共に、既発行の欧米資料（水産関係団体、会社等の発行にかかるものなど）を、とりまとめて入手配布出来る方向を検討されたい。現状では担当官の個人的努力で行っている。

(5) 担当者の海外派遣

水産研究コースにおいては、多くの受入担当官が海外経験もなく指導を担当している。今回事後指導に際し各国の実情を見聞き得たことは大変有益であり、今後の指導にあたって、より実情に即した変更を加えることの必要を痛感した。

担当官に対して実情を認識させることは指導上有益と思われるので、短期であってもなるべく多くの者に機会を与えるような配慮を希望する。

(6) 保蔵設備の充実

アフタケア、機材供与等に関連して漁獲物保蔵設備があげられよう。

訪問各国において漁獲量増大のために漁船やエンジンの要望が強かった。しかし漁獲物処理の現状を見ると保蔵、鮮度保持等についての配慮が非常に少なく、有効利用率が低いのではないかと思われる。(3)の機材供

与にも関連することであるが、保蔵等の設備（製氷や冷凍）を備えることにより無駄をへらせば漁獲量増大に劣らない効果を挙げ得ると思われる。

Ⅲ. 報 告 2.

農林省 国際協力課 五十嵐 住夫

9. Questionnaire の分析

(a) 質問事項の内容

1. 国名
2. 氏名
3. 現職
4. 研修年度
5. コース名
6. 研修時職名
7. 現在の技術的問題点
8. 帰国後の待遇
9. 帰国後の研修評価（研修員側から）
10. カリキュラム等改良意見
11. 本人又は上司の期待と研修内容の適応度
12. 情報交換等
13. その他

(b) 回答状況

総回答数 21

フィリッピン	19	(沿岸漁業3, 水産研究4, 個別2, その他10(淡水 水統等)

※集約における問題点

- ① マレーシアは少人数、短期間のため配布せず。
- ② スリランカは時間的に回収困難となり別送依頼。
- ③ 筆記体で解説困難のもの多数。

(c) 回答内容の概要

7. 技術上の問題点

回答者の半数が何らかの問題を持っている。特に研究もしくは指導等を進めるに当たっての資機材不足についてが多く、より新しい知識・情報の習得を希望している。(養殖、統計、漁具)

8. 帰国後の待遇(地位、賃金を中心に)

良くなった 16 (転職後のものを含)
変わらない 5 (帰国後間もないものを含)

9. 帰国後の研修評価(研修員側から)

有効 20 (問題はあるながらも一応役立つを含む)
効果少い 1

10. カリキュラム等改良意見

参加したコースによって種々分れるが主要なものについて次の如き意見があった。

- イ. エビ養殖……………生態学の短期基礎コースを(個別)。
- ロ. 淡水コース……………広い分野をまとめるのに短かすぎる。
- ハ. 水産統計コース……………データ収集のための実技指導を。
- ニ. 沿岸漁業コース……………補習期間の有効活用・充実を。
- ホ. その他……………実験の計画、方法の研修を。

資源調査、養殖の実習を。

集団の中に個別実習を。

11. 本人又は上司の期待と研修内容の適応度

十分 13
不十分 1
比較的良 6
その他 1

12. 技術情報の交換

結論としては、すべての水産関係英文出版物を希望する。

(リーフレット類をも含む)

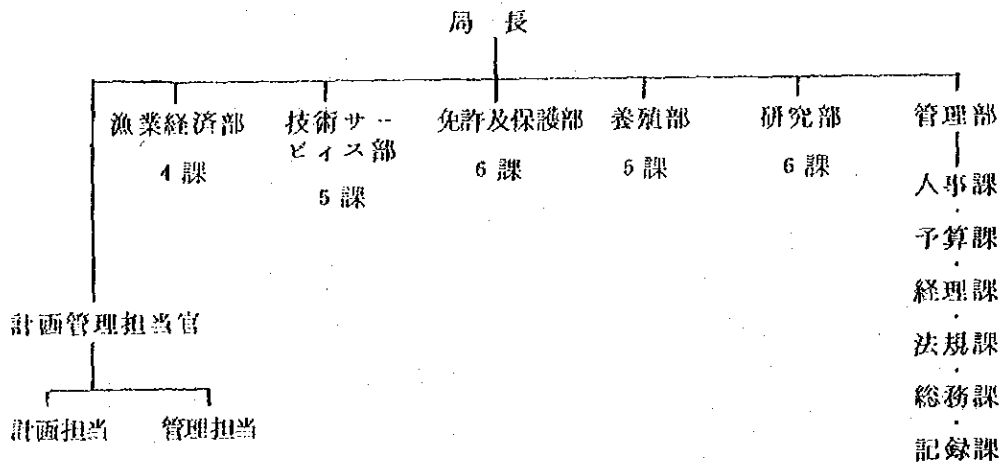
手段としては、JICA事務所、同窓会、所属機関を媒介として欲しい。

13. その他

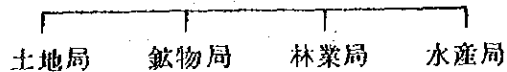
コースの期間、水族館管理、えび養殖技術者、協力隊、専門家の語学力等々についてであり最も多い意見要望としては、再研修希望5~6人がこの欄に記入している。

10. 組織図

フィリピン水産局(約1,800人)

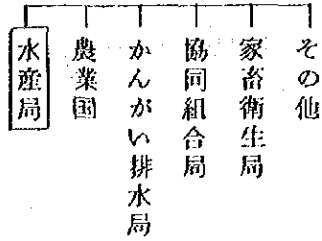


土地及天然資源省

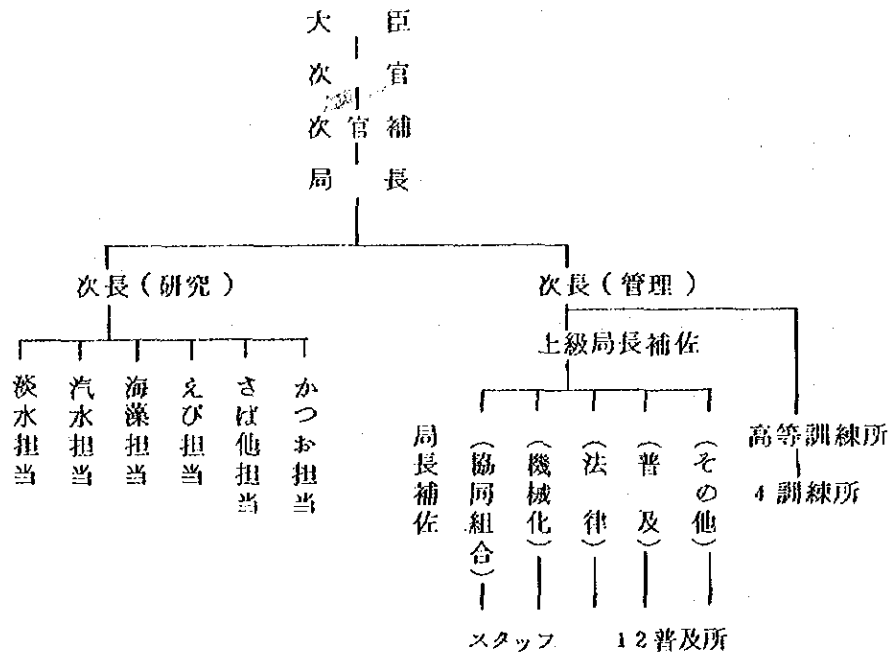


マレーシア

農業及地方開発省



スリランカ水産省(約500人)



11. 水産班巡回指導レポート

巡回指導の目的

「帰国研修員に対するフォローアップ事業の一環として、その所属先及び関係機関を訪問し、当面する技術的問題について意見の交換を行うと同時に、帰国後の実態を把握することにより今後の研修員受入事業及びアフタケア事業の改善に資する。」

上記目的中「今後の研修員受入れ事業の改善に資する。」を視点を置き、①帰国研修員の活動状況、研修成果の評価検討、②帰国研修員の所属先の概要、③研修員派遣の一般事情等を中心として以下記すこととしたい。

(a) 受入れに関する要望

(1) General Information の早期送付について

いづれの国からも要望があり、従前からの懸案項目であったが、本年度より JICA は G.I 送付以前の早期に G.I の概要的なものを対象国に配布する等の措置を実施するため改善の一步となろうし、研修員送出国のおよその要望期間（3ヶ月前）にも支障はなくなると思われる。

(2) 受入れ決定の早期通報

集団コースに関するこの問題は、前記(1)に大きく左右されることになる。すなわち、「G.I が遅い」－「選考が遅れる」－「Form A3 提出が遅れる」－「決定が遅れる」の悪循環である。もちろん原因はこれのみと一概に言えないが、日本側も Form 等検討材料がそろえば処理は早期に行っており、今後はこれら処理は引きつづき努力しつつ、送出国側は G.I 前の情報をもって一応の選考を始められることを望むところである。

個別研修についても「要請」→「決定」の措置を早く的確に行うことはもちろんであるが、決定から出国までの期間に余裕をもたせ、研修への準備期間を配慮することが必要であろう。

(3) 再研修要請

あらゆる機会に当該問題は出されている。もちろんこれまでの巡回指導チームの報告の中にも見られる。要望としては理解できるが、要請が各国の国情による優先度により処理されることが基本となろう。

しかし、再研修の効果は①日本の事情を技術的問題を含め了知している。②テーマに対し問題意識が強くなっている。等々多くあげられ、その意味でも必要な事業であることは言うまでもないところである。現在も、制度的ではないが、かつての集団コース参加者が個別研修で同様のテーマを深めに来る事例はある。(スリランカ、水産カウンターパート)これらはまだ特別な例であるが、この様な方法も現実的かつ効果的な方法であると思われる。

再研修を集団で行なうことは現状では困難であろうが、短期間研修、国別研修、セミナー方式等集約的実施が考えられるところであり、その効果は極めて大きいものと思われる。

(4) 水産加工コースの設定(フィリピン)

当要望は、研究分野よりもむしろ実施実習分野における研修を希望しているものと思われる。その点では現在のところ民間会社の全面的協力を求めることなしには不可能と思われるが、充実した研修を実施するならば研修機関としての対応が可能なところに制限されるであろうし、それ以外では会社としての強力なバックアップを必要とするであろう。個別としての対応もしくは会社の協力との関連で実現の可否が決定されると思われる。

(b) 主要訪問機関の事情と日本における研修

(1) フィリピン、東南アジア漁業開発センター(SEAFDEC)養殖部局

部局において①予算・人事の機能、②国際機関としてのあり方、③次長欠員から生じる問題、④種々の問題から派生する研究部門への障害等の問題があると言われる。

しかし、これら問題はありつつも将来的な拡充計画、地元（フィリッピン）としての力の入れ方、現施設の充実さ等の点から考えると有効な機関であると思われる。

もちろん進むべき方向又研究部門と管理部門との調整に十分注意すべき必要はあろうが熱帯、東南アジアに適応した環境と施設、人材を確保することによって水産養殖等の実用技術、応用面の有効な訓練機関となり得るものと思われる。

日本における研修の充実も当然のことながら、第3国研修の一つとして将来的に考慮すべき必要もあろうと考える。

参考〔本年度より部局として訓練計画を持ち、カウンターパートとして日本において研修した2名も研究部門の現地幹部候補生として従事している。〕

(2) フィリッピン、マレーシアの水産機関と研修

2国にスリランカを加え今訪問国に共通して言えることは研究等の設備の不足であろう。フィリッピンにおける水産研究等の中心と言われるU.P（フィリッピン大学）においてさえである。

大学における年齢構成、設備から思わせる研究内容等から判断すると、我が国の国立研究機関における専門研究、研修が適当であるか否か再度考えさせられるところである。もちろん当該研修が必要な人も多いと思われるが、そこにおける研修は、研究者相互又は研究機関においてテーマ等を十分に明らかにした上での研修であるべきではなからうか。方法を考え、集団として実施する際には特段、資格、背景を十分考慮判断する必要がある。

一般的には、県レベルもしくは検査指導機関における研修が最も適当であろうと思われる。後述する普及員もしくはその指導者を養成する意味からも、その種の機関への受入れの拡大を計る必要が考えられる。

普及員もしくは普及員の指導者を養成することは、いづれの国も強く

望んでいるところであり、自国独自の養成計画とともに先進地（日本他）における訓練を強く要請している。

東南アジア諸国において必要とされるのは、漁民を指導する人作り、水産業発展の大きな力となり得る人材の養成であろう。農業においても又同様である。そうした点で各水産局等の上層部が強くその必要性を説くのは理解出来るが、現在、我が国の受入れ機関は国立の研究機関を中心とした限られた機関における受入れとなり、とりわけ実用技術実習面を中心とした受入れ機関は少ない。従って前述の県水試、検査指導機関、学校等の受入れ機関拡充は重要な課題であろう。もちろん民間の団体、会社との協力関係も強調したいところである。加えてJICA神奈川水産センターの充実も計画的に計る必要がある。

例えば、①派遣前・後の専門家との関係、②JOCVの派遣前・後の関係、③他の研究機関等との強い協力関係もその要素となる。

(3) スリランカ高等水産訓練所と帰国研修員

帰国研修員の数に驚きを感じさせられた。ネゴンボ水産訓練所を中心としたこれまでの協力事業で生み出された神奈川センター（前三崎センター）を始めとする帰国研修員の層の厚さはスリランカ水産業の中堅をしっかりと握っていると思える。

先のプロジェクトの成否はともかく、この4月に開講した新プロジェクトへの発展、それらに寄与した帰国研修員の役割は大きいものと考えられる。

ス国の方向とマッチしたプロジェクトであったことは事実であろうが、カウンターパートとしての帰国研修員がさらには再研修の道を開かれたカウンターパートとして業務に励み、プロジェクトを推進している姿が印象的であった。

これらがス国の水産後継者を育成し、自からの発展に大きく貢献するものと思われる。

もちろん、新規プロジェクト、さらに水産開発には大きな困難がある
と が派遣専門家への信頼と自助努力を基礎としたプロジェクトの推進
は、期待をするところ大であると考えられる。

我が国の受入れ研修も、その指導者を養成する一開発に貢献できる資
質をもった人材養成に大きな責務をもつものと考えたとともに研修員自
からの問題意識と研修内容の充実とが最も重要な課題となろう。

(ここで、研修レベルと研修機関との適合性の問題も生じるところであ
るが。)

(c) その他

フィリピンの同窓会組織・活動を見て

定例幹事会、主催、後援の「行事」、その組織的かつ活発な活動に驚か
された。

連絡、情報整理等積極的に行なわれているのを知り、帰国研修員のアフ
タケアに大きな役割を果し得ると思われる。

各国の同窓会組織活動は国情、歴史等により大差があると考えられるが、
この育成強化を強く訴えたいところである。

JICAの現地事務所等の努力も大きいと思われるが、友好的かつ活動的
な事業として効果的措置を望みたいところである。

IV. 報 告 3.

JICA 神奈川国際水産研修センター館長

飯 淵 貞 利

JICA 神奈川国際水産研修センター副参事

石 渡 健 次

12. 巡回指導旅行雑感

昭和50年2月25日より3月17日に亘って、フィリッピン、シンガポール、マレーシア、スリランカの諸国を巡回指導の目的をもって訪問した。細部の具体的事項については東海区水研の梅林氏、農林省の五十嵐氏によって報告されているのでこれを省略し、旅行中に感じたことを二・三申し述べたい。

(a) 各国の水産行政機関の attitudes

各国の水産行政機関の Development of fisheries に対する attitudes には各国情によって大きな相違があることが期待されたが、結果的には大同小異であり、その国々による特色を見出すことはできなかった。

各国共通して Development という言葉がたびたび使われたが、その目的意識は漠然たるものの様に思われた。それは漁獲量の増大（内水面漁獲、エビ養殖を含めて）、そのための施設の増加、等々が Technocratic な面に於てのみ論じられて居る様な傾向が見受けられた。

器材の不足、技術者の不足が到る所で訴えられるが、具体的な発展計画に対する不足ではなく、援助国に対して口癖的に言われているのではないだろうかと思える程漠然たるものであった。

通常、その国の海岸線の長さには水産資源量が比例するかの如き観念がもたれるが、今回も度々その様な口吻に直面した。気候とか海況とかが、資源量に関して考慮されたことはなかった。沿岸に魚が居ないから沖合へ行

く、沿岸距離が長いから資源は豊富である、と全く気楽に考えられている。

又、経済の面から水産を捉えることが希れであることは最も目立つ現象である。増加した漁獲物がいとも簡単に輸出即ち外貨の獲得に結びつけられることは見事なものである。各国の食習慣にもよることであろうが、国民の食糧としての考え方が無いことには一驚を喫した。従って、国内のマーケティングの概念も至って漠然たるものである。品質管理、価格の形成等は遙か彼方にある様だ。

スリランカのコーポレーション経営の冷蔵庫は収容能力 5,000 等に及び、スケールアイスマシン二基を有する近代工場である。カヌーで漁業を行っている漁港にしてこの工場である。従って閑古鳥が泣く様な閑散振りである。しかも大都市であるコロンプにはこれに対応する商業的冷蔵庫も存在しない場合、経済行為としての水産業へのセンスの有無は問題以前の事となる。しかもこの冷蔵庫は日本商社の援助によって建設されたと聞いては我々も開いた口がふさがらないとはこの事であった。

水産低開発国を毒するものの一つは無定見な援助であるとは言えないだろうか。彼等の needs は必ずしも正しいとは限らない。彼等は水産の開発ということにすら定見を持つまでには至っていない。従って彼等の needs に meet するという寛容にして、外交的な観念は援助の効果を低下させる事があることは戒心すべきであろう。

(b) 水産教育について

今回の旅行ではフィリッピン大学水産学部、スリランカ水産高等専門学校及び Negombo, Tangalle の両漁業訓練センターを視察した。その設備等については他に記述してあるので省略する。

途上国を訪れたときいつでも感じることであるが、教育行政当局の考え方に大きな偏向がありはしないかと云うことである。

それは、大学が余りにも多く（設備は余りにも貧弱）かつ権威として偏重されすぎてはいないだろうか、そして general section が偏重され、技

術 section でもアカデミックに走りすぎはしないだろうか。その反面、中学、高校程度の職業としての水産教育機関が殆んど見当たらないことは希異である。

大学、高等専門学校を設置には極めて積極的な教育当局も水産職業教育には殆んど興味を示していない。Negombo, Tangalle の漁業訓練センターも新設の水産専門学校にお株を奪われた恰好で意気誠に上らぬものがあった。現地の先生方も当局の訓練所に対する関心が薄れたことをなげいていた。

Negombo, Tangalle の漁業訓練所の機関科卒業生の多くが漁業に携わず自動車修理工場へ流れることを訴えていた。日本でも同じことがいえるが、漁村の生活水準、社会制度、慣習、漁民の attitude とからみ合って漁村の将来を暗示し、かつ漁村からの流出入口をどの産業部門が吸収し得るか、大変な問題だと考える。

ともあれ、水産に関する限り、各国当局の教育に対する考え方は逆ピラミット型で高等教育のみに関心が向けられてはいないだろうか。もっと無遠慮な言い方をすれば、大学という名をもつものを作り、ディプロマを与えることが最大の関心事の様に思われた。

(c) 結 び

3 週間の旅行を通じて私達は色々の事を感じ、考えさせられた。

- (1) 途上国の水産開発の意義を明白に捉えるならば、“沿岸漁民の生活水準の向上”に第一順位が与えられるべきである。
- (2) 水産教育は一つの高等教育機関を設置するよりも、二つ、三つ……の職業的普通教育機関を持つ方が有効である。
- (3) 途上国の水産開発援助は単に技術援助や資材供与のみでは解決できない。自国の現状を直視できる積極的な物の見方の裏付けこそが緊急事である。
- (4) 第3項に述べた“現状を直視する態度”を養わない限り、当センター

の卒業生の漁業普及効果は望むべくもない。

- (5) 統計を急速に整備強化すべきである。

一応の統計数字は各国にあるが、データのリソース、解析、推測、検査等は誠に心細い限りである。

資源統計、社会統計としての水産関係の統計機関の強化が望まれる。

- (6) 漁業を“スナドリ”的な自給自足的な形態から脱却し市場商品としての生産業たらしむべく、政府は市場機構、或いは流通機構の指導監督にもっと強力に介入すべきではないか。

- (7) その他感じたことは数限りなくあるが、我等の仕事の前途多難を思わせる事ばかりである。

外交的な安易な楽観主義や Technocratic な考え方は何の役にも立たない。我々（彼等を含めて）今暗中摸索中かもしれない、試行錯誤を重ねているかもしれない。

唯いえることは、

“Not an Alibi but a Challenge” ということである。

